

琴—近代日本クリスチャン女性の生活史—(二)

川村清志

三章 牧師の妻

一節 栄の教会運営

日本聖書教会の伝道

栄は琴と結婚する約半年前から宣教師のもとで、伝道師として活動を開始していた。宣教師はジョン・W・ジュールゲンセンといい、妻のネットイ・ジュールゲンセンとともに日本での布教に参加していた。ジョンは、日本聖書教会を設立したC. F. ジュルゲンセンの長男である。

宣教師からの月給は四〇円だが、二人で暮らすには、質素な暮らしを余儀なくする額だった。ちなみに琴が学校

で退職前にもらっていた月給は四五円である。栄は、文書伝道という形で、キリスト教についての冊子を販売しながら、伝道をおこなっていたが、その収入も微々たるものであった。また、以下に示すように信徒の人数そのものが少ないために献金の額も芳しいものではなかった。

日曜日の礼拝は、朝と夜に分けておこなった。朝の礼拝はほぼ午前10時から始まる。夜の礼拝に先立って、栄と琴たちは街頭へ伝道にもおもむいた。それは琴が奈良でおこなっていた伝道と同じようなものである。栄は「基督教」と書かれた提灯を掲げ、琴はよくタンバリンを持っていった。協力してくれる信者にもラツパや太鼓などの楽器を持って、歩いてもらったという。まさに鳴り物入りである。町を歩きながら、楽器を鳴らしていくと人が集まってくる。ある程度、人が集まると町の角や広場など、適当な場所で集会を開いた。

さらに毎週の水曜の夜は祈禱会を開いていた。牧師が聖書を典拠として簡単な説教をおこない、祈りをささげる。それに続いて熱心な信者が自主的に各々の神に祈る集いであった。

琴夫妻は、それ以外の平日のうち、週に一度ほどは宣教師の家にいき、連絡を取り合っていた。宣教師の妻、ネットーは、琴に英語を教えてくれた。しかし、学校で習った硬い発音がなおらず、あまり長続きはしなかったという。今思えば、残念なことをしたと、琴は語っている。約七〇年前の後悔を聞くのも、やや複雑な気分ではあるが。宣教師は、月に一度ほど礼拝で説教をするくらいであった。それでも、何か干渉される窮屈さが栄にはあったようである。やがて栄は、自分だけで独立して伝道をおこなうことを考えはじめることになる。

その後、栄夫妻の家には新たな家族がふえることになる。といっても、結婚後すぐに子供を授かったわけではない。栄の妹の八重子が栄夫妻と生活をともにするようになったのである。彼女は鹿児島の高等小学校を卒業してす

ぐに名古屋にやってくることになった。彼女は幼い頃の病氣のために足が悪かった。田舎での農作業は辛いだろうと思った栄が、名古屋にくることを勧めた経緯がある。八重子もまた、栄によってキリスト教に導かれ、入信していた。

栄の熱心な活動は続けられたが、教会にあまり信徒は集まらなかった。名古屋に遣わされ、琴と結婚する少し前の頃について栄は次のように記している。

昨年の十月に遣はされて此所に一年苦戦苦闘の月日は夢のように去つたが見るべき者は殆ど無い。四年間も居て伝道しているのだから少なくとも十数名の信者は有るものと信じて来名したが、東京の神学部で思つた想像は外れて僅か二名であつた。それも夫婦者で夫婦一体と見れば一人同然だ。^{*1}

信徒が二人とは、あまりに寂しい状態である。もちろん、これでは教会の体をなしているとはいえない。その後の伝道活動も、一進一退であつたことが、これに続く文章からわかる。

かくて幾度か、宣教師J. W. ジュルゲンセン師と祈り祈つて、新しく立上がつた。そして早速、特別伝道会を新設の会堂で開き、三十数名の求道者を与へられた。

一息ついて其の人々の育つ様に先づ祈り始め、かくて訪問したりなどして専心祈る事と御言を伝える事に務めた。されど、悪魔の襲撃甚しく、折角信仰に立上がつた信者達を数名、倒した。其の中には路傍伝道に共に行く者あり、

又早朝祈禱会に来る者もあつて、愈々励まされて居つたに又も大いなる悪魔の襲撃故にもうほとんど失望の極に達した事^{*2}もあつた。

伝道会を開き、一時的に教会にくる信徒は、増えたかにもえた。だが「折角信仰に立上がつた信者達」も様々な事情から教会を離れていった。それを栄は「悪魔の襲撃」と呼んでいる。しかも、かなり熱心に「路傍伝道」や「早朝祈禱会」に参加していた信者までが、離反していったという。栄が「失望の極に達した事」と記すのも仕方ないといえるだろう。

しかし、これはある意味で仕方がない背景がある。すでに記したように栄が伝道師の資格を取得し、所属していた「日本聖書教会」は、当時、日本で宣教するプロテスタントのなかでも新興の教派だった。経済的にも人材の面でも、非常に厳しい状況であったことは明らかである。

だが、このような状況でも、栄は悲嘆にくれていたわけではなかった。先の「報告」のあとには、次のようなエピソードが記されている。

又十月一日は忘れる事の出来ない恵の日でありました。五名の兄弟は名古屋市外八事の池で小生に依り受洗致しました。前の日迄の雨が降りつづいて居たのにかかはらず、主は我等の祈りに答へ給ふて其の日は朝から日本晴れだ。一同元気で八事の池に付く。一五六名共に主を賛美し祈りし最後に受洗者への質問。一同主に在り信仰に依りて答弁。かくて小生が水に入れば兄弟が共に賛美し初める。そして続いて五名の兄弟は水に入り来りて受洗した^{*3}。



写真1 栄の最初の洗礼式

ここには、栄自身が牧師としてはじめて信者たちに洗礼を施した経緯が紹介されている。五名の信徒は郊外の池に集まり、それ以外の信者も参加して受洗はおこなわれた(写真1)。栄は信者を導くためにあらかじめ水のなかに入り、信者もそれに従った。それは、栄自身にとっても「忘れる事のできない恵の日」であったに違いない。信徒を導くことの使命感と達成感が、彼の文章からはにじみでている。あるいは、牧師に叱られつつ授けられた須磨の海での自らの洗礼を、彼は思い起こしていたのかもしれない。

『後の雨』

すでにその一部を紹介してきたが、栄や琴の活動の様子は、彼らが発行していた『後の雨』という伝道紙から知ることができる。

この冊子は、昭和四(一九二九)年六月一日に創刊号が発行されている。名古屋における聖書教会の機関紙として発行されたものである。この本で参照できたのは、創刊号から昭和八(一九三三)年四月一日に発刊された四九号までである。その冒頭で、ジュールゲン

センは、『後の雨』というタイトルについて、次のように記している(写真2)。

扱て「後の雨」とは如何なる意味なるや、極めて簡単に述べて見ませう。

旧約聖書ホゼヤ書六章三節に「後の雨の如く地をうるほし給ふ」。ヨエル書二章廿三節に「春の雨」、申命記卅二章二節に「わが教は雨の降るが如く」と録されて居る。

雨の意味には様々な霊的教訓があるのであります。又イスラエルの季節から見ますと、「前の雨」とは初冬の雨

でありました。種蒔の時に降る雨でありました。

これを霊的意味に解せば悔改めて信仰に入る時に
聖霊の感動に接するの意が含まれて居るのであり
ます。「後の雨」は春の雨であつて、この雨の降
る事により冬に播かれた麦が熟するのでありま
す。霊的意味に於ては悔改めたる靈魂が、これに
よつて熟するのであります。すなわち基督者は、
此の雨によつて果実を持てる信者となるのであり
ます。かかる意味に於て「後の雨」なるものが生
れ出たのであります。^{*4}



写真2 「後の雨」創刊号

『後の雨』というタイトルは旧約聖書を典拠としたものとされる。地中海沿岸に位置するイスラエルでは、種を播く時期を知らせる「前の雨」と春になって播かれた麦が熟するのを促す「後の雨」があったという。これが信仰の比喻として解釈され、まず、「前の雨」によって悔い改めた信者——おそらく洗礼を指す——が「後の雨」によって「果实を持てる信者」になると位置づけられている。よって「日本聖書教会」の教えのなかでは、キリスト者は、単に洗礼を受けただけでは十分ではないと考えられていた。では、彼らにとっての「後の雨」とは何を指すのだろうか。

以前にも指摘したように、「洗礼」は、クリスチャンにとっても重要な通過儀礼であるはずである。しかし、とりわけ「日本聖書教会」では、真のクリスチャンとなるために、洗礼をうけたあとにさらに重要視される経験があった。ジュールゲンセンは次のように記している。

今日の多くの基督者は、この「後の雨」の経験を有してゐない様に思はれるのであります。故に果实を持てる信者の生活に至らないのであります。彼等は豊かな霊の満しと溢れる夕立の恵みとを経験しないのであります。

この「豊かな霊の満しと溢れる夕立の恵み」こそ、彼らが「聖霊のバプテスマ」と呼ぶものにはかならない。「聖霊のバプテスマ」は、新約聖書の四福音書や使徒行伝、パウロの書簡のなかに見出すことができる。たとえば、「マタイによる福音書」のなかでイエス・キリストは、バプテスマのヨハネという人物から、水による洗礼を受ける記述がある。その場面を少し抜粋してみる。

そのときイエスは、ガリラヤを出てヨルダン川に現われ、ヨハネのところに来て、バプテスマを受けようと言った。ところがヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った、「わたしこそがあなたからバプテスマを受けるはずなのに、あなたがわたしのところにおいでになるのですか」しかし、イエスは答えて言われた、「今は受けさせてもらいたい。このように、すべての正しいことを成就するのは、われわれにふさわしいことである。」

そこでヨハネはイエスの言われるとおりにした。イエスはバプテスマを受けるとすぐ、水から上がられた。すると、見よ、天が開け、神の御霊がはどのように自分の上に下ってくるのを、ごらんになった。また天から声があったと言った「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。」^{*5}

このバプテスマのヨハネは、イエスのイトコであるとも言われている。イエスに先立って伝道をおこない、救い主であるイエスの到来を預言していた人物である。また、彼は、後にユダヤの王ヘロデによって斬首されることになる。

福音書にはイエスがまず、ヨハネから水によるバプテスマを受けたと明記されている。これを典拠としてキリスト教では、信者は必ずバプテスマを経なければならぬとされる。しかし、聖書の記述はそれでは終わらない。イエスが岸にあがると「神の御霊がはどのように自分の上に下って」きたという。これが、「聖霊のバプテスマ」と呼ばれるものである。

じつは、これに先立ってヨハネ自身が「わたしのあとから来る人はわたしよりも力のあるかた」であり、彼は「聖霊と火によっておまえたちにバプテスマをお授けになる」と語っていた。^{*6} また、イエスが復活して天に昇った後、

イエスの使徒たちのうえにも「聖霊のバプテスマ」がもたらされ、彼らは迫害を恐れずに伝道を始めつつ経緯が記されている。^{*7}

このような「聖霊のバプテスマ」が重視されたのは、一九世紀以後のプロテスタントの「覚醒運動」によるところが大きい。リバイバルと呼ばれるこれらの運動では、霊的な覚醒によって自らの罪が赦される経験が重視されてきた。リバイバルを経験した信徒たちはそのような経験を容認しない既存の教会を批判し、しばしば、教派を横断するような運動を引き起こしていく。そこでキーワードとして選ばれたのが、「新生」であり、また「聖潔」であった。

しかし、「日本聖書教会」は、二〇世紀以後の新たなリバイバルを標榜し、「聖霊のバプテスマ」のより明確な特質を主張していた。それが、「異言」ないしは「方言」である。先に述べたイエスの弟子たちに「聖霊のバプテスマ」がもたらされた場面を引用してみる。

五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっばいに響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した。^{*8}

「五旬節」とは、ユダヤの三つの大きな祭りのなかで最後に位置づけられる。旧約聖書に記されているユダヤの

民がエジプトでの奴隷状態から解放されたことを祝う祭りが「過越の祭り」である。その祭りから五〇日目の日を祝うのがこの五旬節である。ここでいう「みんなの者」とは、イエス・キリストの使徒たちをさす。イエスが復活して天に召された後、使徒たちは迫害をおそれて、潜伏生活をいられていた。彼らが集まっていたところへ「舌のようなものが、炎のように分れて」各々の上にとどまった。すると彼らは、「御霊が語らせるままに、いろいろ他国の言葉で語り出した」と記されている。

この「御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した」という表現こそが、「異言」ないしは、「方言」にほかならない。もつとも、「他国の言葉」というのは具体的な外国語を指すわけではない。信徒が祈っている最中に、自らは意識を失った状態で神を讃えたり、聖句を唱えることをさすようである。この出来事は「聖霊降臨」^{ペンテコステ}とも呼ばれ、キリスト教でも、この日は大切な祭日として記録されることになる。

『後の雨』では、このような「異言」方言」と「聖霊のバプテスマ」との関連性が明言されている。

後に聖霊のバプテスマの表證は、方言であります。はつきり聖霊のバプテスマを受けるならば方言を語ります。この方言は聖霊のバプテスマの結果として語るものであります。

単純な心を以て聖書を読むならば聖霊のバプテスマを受けた人は方言を語りました。要するに聖霊に満たされた者には方言が伴いました。聖霊のバプテスマを受ける時に方言が必ず伴ふことが我らは信ずるのであります。(中略)故にこの聖霊のバプテスマを受けた時に方言を経験することを否定することが出来ません。信仰だけならば否定することが出来るかもしれませんが、信仰を以て受けた経験を外部に現はすならばそれを否定することが出

来ません。勿論後に生涯によつて変ります。けれども聖霊のバプテスマによつて別の経験をします。外部まで現はれるならば周囲の人々も確實に證據を立てることが出来ます故にこれを否定することが出来ません*。

これも『後の雨』に記された宣教師の文章である。彼が強く主張しているのは、「方言＝異言」こそが、「聖霊のバプテスマの表證」という点である。彼は「聖霊に満たされた者には方言が伴ひ」、「聖霊のバプテスマを受ける時に方言が必ず伴ふ」ことを信仰の中核にすえている。人間の内面に関わる信仰は、「否定することが出来る」かも知れない。そもそも、「信仰」は、人の目にみえないものであり、証明のしようがないものだからである。しかし、「信仰を以て受けた経験を外部に現はす」方言は、否定することができない。そのように宣教師は捉えている。このような信仰の特質について、もう少し『後の雨』からみていくことにしたい。

「聖書教会」の位置づけ

ここで紹介するのは、「日本聖書教会」の「信仰綱要」である。この綱要は「聖書のあらゆる真理を網羅して居るとは云わないが、少なくとも信仰の根本問題に関して、我らに必須なるものを包含して居るもの」と位置づけられている。『後の雨』第二号には、以下のような十六の綱要が示されている。

信仰綱要

第一 靈感によりて記された聖書

第二 唯一なる真の神

- 第三 人類の堕落とその贖罪
- 第四 人の救ひ (イ) 救の条件 (ロ) 救の証明
- 第五 水のバプテスマ
- 第六 主の晩餐
- 第七 父の約束
- 第八 聖霊のバプテスマの証明
- 第九 完全な聖潔
- 第十 教会
- 第十一 聖職と伝道
- 第十二 神癒
- 第十三 幸福なる希望
- 第十四 イエスの千年王国
- 第十五 火の池
- 第十六 新天新地^{*10}

これらのなかには、ほぼすべてのプロテスタントに受け入れられる内容のもの、当時の新興の教派と共通するもの、さらには「日本聖書教会」がとりわけ強調するものが併置されていて興味深い。なお、これらの綱要は、実際に琴や栄の信仰観とも大きく関連している。彼らの意識がどのようなものであったかは、この章の後半で問いな

すことにしたい。

おそらく、第一から第三の綱要、さらに「第十の教会」、「第十一の聖職と伝道」などは、ほとんどすべてのキリスト教会によって遵守されるべき内容である。

それに対して、第四の「人の救ひ」や、第五の「水のバプテスマ」では、いずれも「新生」という言葉が用いられている。「かくて彼らは、……キリストともに甦へり、新生の道を歩む」といった用法である。また、第九の「完全な聖潔」や第十二の「神癒」は、一章でも記したホーリネス派の福音と共通する考え方である。「聖潔」では、「全き聖潔は凡ての信者に対する神の御意志であり」、その恵は聖霊によって与えられる。「神癒」では、「疾病からの救ひは、贖罪のうちに含まれて」いるもので、「凡ての信者の持つ特権」とも語られている。

もう一つの特徴として、第十四から十六までのイエスの「再臨」を具現化するような綱要の存在がある。これら三つの綱要は、すべて新約聖書の巻末にある「ヨハネの黙示録」を根拠としている。なかでも、「イエスの千年王国」は、「聖書の約束であつて、且つ世界の希求である」と記される。ただ、現在のプロテスタント諸派で、このような終末史観を前面に押し出す教団は少数派である。しかし、一章でもみたように「再臨」を待望する信仰は、ホーリネス派においても顕著にみられるものであった。また、ほぼ同時代には、無教会派として知られる内村鑑三も、イエスの再臨を盛んに提唱していた。^{*11}このような信仰が主張される背景には、当時の不穏な国際関係や社会情勢が影響を与えていたのかもしれない。

以上のように聖書教会の綱要には、ホーリネスなどが強調する「四重の福音」のキーワードがすべてそろっていることが確認できる。また、「聖霊のバプテスマ」についても、メソジスト派以降の覚醒運動のなかで、盛んに議

論されていたキーワードでもあった。むしろ重視されたのは、そのような救いの経験をどのように信徒が実感し、また、他の人びとに表明しうるのかという点であったようである。

その意味で、やはり第八の「聖霊のバプテスマ」の力点の置き方が、聖書教会においては特徴的であるといえそうである。そこでは、「聖霊による信者のバプテスマは、神の霊が彼等をして言はしめるがままに、異言を語る身体の上の兆によって、証しせらる」と明言されている。「異言」こそが、「聖霊のバプテスマ」をその身に受けた証であると信じられていたのである。

この「異言」についての記事は、初期の『後の雨』において枚挙にいとまがない。まず、文字通り聖霊のバプテスマに関する聖書の解説をおこなった「聖霊のバプテスマ」(二、三号)、聖霊のバプテスマにより「聖霊降臨」の同時代における展開を論じた「ペンテコステ福音宣伝の根拠」(四、五、六、七号)などが掲載される。また、信仰上の「新生」や「聖霊のバプテスマ」の重要性を様々な角度から論じた「新生と聖霊のバプテスマ」などは、六号にわたって連載されている(八、九、一〇、一一、一二、一三、一四号)。さらに「方言の歴史」(二六、一七、一八号)では、「方言≡異言」をめぐる歴史の再構成がおこなわれている。^{*12}ここで興味深いのは、「方言≡異言」が、初期のキリスト教から中世をへてプロテスタントの時代まで、多くの信仰者のなかに見出されたと主張していることである。

たとえば「紀元一一五年に小アジアに生まれ」たインニウスという伝道者の記述から、「使徒時代より百年後に於てさえ、教会内に於て預言をなし方言を語ることを得るものが多くあった」という。^{*13}さらに宗教改革を遂行したマルチン・ルターもまた、「預言者であり福音宣伝者であり方言を語るもの」^{*14}であるという記事が引用されている。

キリスト教の歴史を通じて「方言」異言」への信仰が遍在していたことを示すことで、その正統性が補強されているわけである。

以上のような「聖霊のバプテスマ」と「異言」の重要性が繰り返されることで、信者たちはその教えを内在化していったのではないだろうか。やがて、『後の雨』には、宣教師の言葉を追体験するかのように自らの「異言」の体験を告白する信者が現れることになるだろう。

二節 聖霊のバプテスマ

父、政吉の死

名古屋での生活がようやく落ち着いてきた頃、奈良にいる琴の父、政吉の病状がおもわしくないという連絡があった。それを聞いた栄は、取りあえず琴を名古屋に残し、義父の見舞いに奈良に向かった。交通手段は自転車である。

余は此の前生れて初めて自転車旅行をした。名古屋から奈良まで約四十里の旅であった。與へられた者の父君が大病を煩い死に直面されたと聞き実に断腸の思いであった。

汽車で行けば四時間で行けるのだが、何しろ古い自転車で行ったので進行時間を十七時間も要した。汽車賃がなかつたと言う訳ではないが、生活費に困るようになるおそれがあったためである。食すために借金をしなければならぬまいと考え、敢えて冒険なことをやつた。

第一余は借金することを主の御旨であらざることとしている故になければ食わぬ覚悟である。一切現金主義でど

こちら見られてもこすばい所のなきよう務めている故にいつも気楽だ。ただし、奈良の親類の家を結婚して初廻りするのに手土産一つも持つていけなかつたことは残念であつた。^{*15}

今日なら奈良と名古屋間を自転車で越えることは、それほど困難なことではないかもしれない。しかし、当時の道路事情や自転車の性能を考えるなら、この行程は苛烈なものだつた。四〇里、約一六〇キロの道程を彼は自転車で走破したわけである。進行時間に一七時間を要したというのも——後に述べるように少々の寄り道があつたといえ——領けるところである。この見舞に際して、栄と琴の父、政吉とのあいだにどのようなやりとりがあつたのかは、分からない。ただ、栄は、亀の血を飲めば良くなると、どこからか亀を手に入れてきた。しかし、政吉はそれを嫌がり、亀は家の近くの猿沢池に放してくるように言ったという。「奈良の親類の家を結婚して初廻りするに手土産一つも持つていけなかつた」という表現は、栄の性格を物語っているが、果たして政吉と栄はどのような会話をかわしていたのだろうか。

・・・如何にしても余の聞いて頂き度い事は福音である。妻も幾度か幾度か勧めたが受入れない。故に余は少々失望して居たが勧め様と思つた所が、話しかけると年寄の癖で何教でも何宗でも詰る所は同じだと言ふ。

故に余は答へた。ああそうです、真理を知ると言ふ事の為には或は確に人間以上の実在者のある事を認める為にはやり方は多分同じだろう。故に話が老人には少し六ツかしく成るので語らなかつた。^{*16}

これは、栄がキリスト教とそれ以外の宗教との違いを述べた文章の一節である。彼は病床にある政吉に福音を説こうとした。それ以前には琴自身も、何度かキリストの教えを伝えようとしたことも記されている。だが、政吉は、キリスト教の教えも仏教や他の教えも「詰まる所は同じ」であるといつて栄の言葉を受けつけなかった。栄自身は納得していなかったが、義理の父の病状も考慮したのだろう。「少し六ツかしく成るので語らなかつた」という。結局、栄の思いと政吉との考えはすれ違いのまま終わったようである。

ちなみに栄は、このエピソードに続けて、キリスト教と他の宗教とが同列であるという視点を激しく批判している。栄にとって、唯一の神、イエス・キリストと釈迦やマホメットが同列に語られることなど、到底、容認できることではなかった。その問題について、後に述べることにしよう。

政吉は、一九三二（昭和七）年の八月二二日に逝去する。胃癌であった。おそらく、死期を察していたのだろう。皆が忙しくないときに死にたいと話していたという。実際に亡くなったのは、盆も終わり、親族の身の回りが一段落したときである。当然、葬儀に際しては、栄と琴は二人して奈良に向かうことになった。

年を取ってからの子供だったので、琴を可愛がってくれた父であった。琴の悲しみも深かったが、その悲しみを深くする周囲との軋轢が、父の葬儀の場で表面化する。葬儀の最中にも、ある親戚が、「あんたが遠い所に行ったから、お父さんが早くに亡くなった」と琴にむかって言ったという。その言葉は一面をついているようにも思われるだけに、琴に重くのしかかった。

もつとも問題となったのは、仏前での焼香の時である。栄夫妻は、クリスチャンとしての信条からこれを拒否する。後に栄は、この葬儀の場について自らの説教の一節として記している。

先日、妻の父君が死去されたので私は實族の方々を見舞に行つた。此の度は幾分の余裕も有つたので自転車ならで汽車で行つた。近親の人々は急しく色々と立働いて居られた。

其の時の事である。妻の兄姉の人々が焼香をせよと迫られた。我等は夫婦共絶対偶像の前には禮拜を捧げない信仰なので非常に困つた。近親の者に迫られる事は非常に辛いものである。併し信仰は枉て神に叛く事は出来ない。故に我等は其の道義を話し固く信仰に立つた。所が姉君なる人がお前だけでもせよと妻に迫られるのである。併し色々と悶着の上、神は此に勝たしめ給ふた。

胸は一杯の感謝である。他の神を拜むべからずとの神の誠めに従ひ得た喜びは涙を流した程の大戦に比べて大きい。押しよする落涙はほとんど三日も続いた。何の涙ぞ神知り給う。其の結果一人の姉君に絶縁せられた。多くの近親達の居る中での宣言であるから、實に強く出られた。併し感謝である。神を力と頼む我等はかかる時にも聖言に望みを置いた我よりも父母兄弟姉妹を愛む者はわれにかなはざる者なり（太十、三十七）とキリストは言はれた。愛する眞の神以外の者に禮拜を捧げざるを故に於いて、謗（ののしり）を受ける事は實に幸ひである。人汝等を憎み（キリスト）の為に遠ざけ謗、汝等の名を悪しとして棄てなば汝ら幸ひなり。その日には喜び躍れ視よ天にて汝等の報は大なり（ルカ六、二十二―廿三）我等は唯神の見給はざる大なる愛を知る故に感謝である。

『焼香は其の順番まで争ふ程の大事なものなる故問題になるで』と他の姉君は言はれた。併し何も問題にせられず歸つて来た。

後で妻も笑つて居た事であるが實に悪魔は色々な手段で持つて信仰を落し入れ様とするのである。^{*17}

栄はクリスチャンとして「偶像の前には禮拜を捧げない」という立場を守ろうとした。しかし、周囲は簡単には納得しなかった。栄がこれを拒むと琴だけでも焼香するように家族の者は促したという。琴も焼香を拒んでいると琴の姉の一人が絶縁するとまでいったという。また、別の姉は「焼香は其の順番まで争ふ程の大事なものなる故問題になるで」と語ったという。「悪魔は色々な手段で持つて信仰を落し入れ」ようとする」と記しているように、栄はこれを自分たちへの試練であると捉えていた。そのような試練を乗り越えたことは神が「此に勝たしめ給ふた」のであり、喜びのために涙を流したとさえ語っている。

もつとも、このような振る舞いは、他の親族からすれば亡き父への不遜な態度に映ったことは間違いない。栄は「近親達の居る中での宣言であるから、實に強く出られた」と記している。だが、親族にしてみれば、家主の葬儀の場で末の娘とその婿が、しきたりを無視するというのである。それは、「強く出る」だけで済んだほうが僥倖とすべきかもしれない。

栄は新約聖書の福音書に出てくるエピソードから言葉を引用して、クリスチャンとしての正当性を主張している。だが、ここでは個人的な信条と家・親族レベルでの慣習的なしきたりが完全に対立しており、お互いの立場を理解しようとしていない。結局、栄と琴は、焼香しないまま、葬儀を終える。しかし、琴と親族とのすれ違いは、キリスト教への入信、遠隔地への結婚に続き、この葬儀の場においてしだいに露になっていった。果たして流した涙は、「感謝」によるものだけだったのだろうか。

異言の経験

牧師の妻としての日々を送っていくなかで、琴自身の信仰生活でも大きな転機があった。すでに記したように榮の属していた「日本聖書教会」では、信仰生活において「聖霊のバプテスマ」という体験を最も重視していた。

そもそも、「日本聖書教会」、後のアッセンブリー・オブ・ゴッド教会は、二〇世紀初頭におけるキリスト教プロテスタントの革新運動であるペンテコステ運動に端を発している。教団の沿革でも、この運動が二〇世紀の初頭、一九〇一年にアメリカ、カンザス州のトペカという町で始まったと位置づけられている。そこで開かれた聖書研究会のなかで「聖霊のバプテスマ」を経験した信徒たちが、アッセンブリーの母体となっていったとされる。

このような個別の聖霊経験は、信者たちが希求するものでもあり、また、実際に「聖霊のバプテスマ」を与えられたと主張する信者もいたようである。『後の雨』には、自らの異言の経験を記している信者もいた。彼の記述から、この経験が個々人の信仰にきわめて大きな影響をあたえるものであることを確認してみたい。

(聖霊は) 実在せる神の約せる賜物である。此れを精神と解しては一寸判らない。吾が心靈に活用する神の霊である故、吾が霊の活きてる如く神の霊も活きて居るのである。

然し、私自身嘗て此の事実を知らざりし如く現代基督者も亦知らない。エペソの弟子達の答へし如く聖霊に依るバプテスマを知らないのである。

水による洗礼を受けても、「火と聖霊によるバプテスマ」を受けて居らぬ、之を信者に尋ねれば「受けた様に感ざられますが」或は「現代にそんな事実は不可能です」或は「そんな事は単に誇張したに過ぎない」或は「そんな

事は知らぬ」等々と答へる。

まして異言を語るに至つては「馬鹿らしい」の一言に罵りて去るであろう。「自己催眠自己暗示だ。そんな事を云ふ宗教は阿片だ」などと云われる、「狐つきになるのは御免だ」と云わう。だが聖書は之に対して判然説明して居るではないか。自己を立場として自己を中心としての宗教。故に聖靈にバプタイせらるる結果必然的に起る事実に對して「使徒行伝中に再三示さる」信じ兼ねるような状態に陥るのである。

嘗てわたしも亦然か考えた。聖靈を受けたと云う人は口許りで有つて自己を偽つて居る偽善者だと考へた。

然し、私が此の事実を、ペンテコステの事実を経験して始めて實在の神を認めたのである。勿論救われた確心は有つたけれど、此の聖靈のバプテスマには随分疑つたのである。科学的殊理論的なのは宗教の特色であると云つても此の事実が有るとは思へなかつた。けれども神は私に此の経験^(マコ)を賜つたのである。

去る一月四日新年聖会の礼拝後、只此を祈つた。而して与へられたのである。その聖靈に満たされた結果、異言を語るに至つた。私にとつては使徒行伝二、〇四は体験となつて表れたのである。第三者から見ると或いは信じ難い事にも思へる。併し私に取つての事実は何者と雖も奪ふ事は出来ないものである。(中略)

之は真に基督者のみに与へられる特権である。亦、此の事実を軽視し、否定する所謂基督者は、神、決して喜び給わぬ。聖書に忠実でないからである。此の御靈を受けて後、始めて主を吾等の主と判然見認め得るのである。^{*18}

おそらく、この信者はかなり高度な教育をうけており、キリスト教の他の教派についての知識をもっていたと考

えられる。彼は、「聖霊のバプテスマ」によって「異言」を語る事が、他のキリスト教徒からも批判的にみられていたことを述べている。「異言」など「自己催眠自己暗示」であり、「そんな事を云ふ宗教は阿片」であるという。このような視点を彼は「聖書全部の否定」であり、「生ぬるい信者を神は許し給はぬ」と断言する。ただ彼は、自分自身もかつては「聖霊を受けたと云う人」を「自己を偽って居る偽善者」であるとみなしていたことを告白する。

しかし、そのような考え方が完全に否定された契機として、彼は自らの「異言」の経験を語る。新年の礼拝のあとで「聖霊のバプテスマ」を求めて祈り、実際に与えられたという。「聖霊に満たされた結果、異言を語るに至った」ことは、「使徒行伝二、〇四」の実体験、あるいは追体験として与えられたことがそこに明記されている。

おそらく、「異言」は、文化人類学や宗教学でいう憑霊状態ポセッションに近いものだろう。憑霊とは、心身を喪失した状態に何らかの（精）霊がとりつき、様々な言動や行為を発するとされるものである。世界各地の民俗宗教では、様々な宗教的職能者がおり、研究者は彼らをシャーマンと総称することが多い。シャーマンのなかには、この憑霊状態で病気の人間を治癒したり、託宣をおこなうと信じられている者もいる。

ところが、琴自身は、もともとホーリネス派に属していたため、「異言」を経験したことがなかった。琴によると、彼女以前にすでに義理の妹である八重子がバプテスマを経験していたともいう。普段の礼拝の祈りのなかで琴と一緒に祈っていると、いつもと様子が異なってきた。祈りの言葉がだんだんともつれたようになって、変わった言葉になっていく。彼女は祈りのなかで異言を語ったのだという。すでに見たように信者のなかにも異言を語る者もいた。

牧師の妻が、まだ、聖霊を受けていないのは、問題であるということになり、琴のために祈祷会がおこなわれた。

夫の栄、ジュールゲンセン夫妻の他にも二人の牧師が来て、皆で祈ることになった。

琴はハレルヤ、ハレルヤと繰り返して神を讃える言葉を唱える。「ハレルヤ」は神への祝福を表わす言葉である。だんだん繰り返していくうちに、呂律が回らなくなりちゃんと言い直そうとする。すると宣教師たちから、まだ、身も心も神に委ねていないと言って叱られた。神に体を預けきったときに、神から聖霊が下り、信徒の口を通じて「異言」が語られると考えられていたからである。人間の身体のなかでも「口」とは、もともと罪深い部位であるとされた。それは簡単に偽りの言葉を吐き、他人も自分自身をも裏切る部位だからである。その口を神に預けることが、何よりも大事なおこないとされた。

もう一度、ハレルヤを唱え続け、だんだんとペースが早まっていった。一瞬、自分では何を言っているのか分からなくなり、ふっと意識が遠のいた。どのくらいの時間がたったのだろう。次に気がつくともみんなが琴を見て祝福してくれた。琴自身は全く記憶にないのだが、どうやら「異言」を語っていたらしい。もちろん、その内容は覚えていない。

栄の実弟、丸山喜納に聞き取りを行ったときにも、彼が信仰において強調したのは、徹頭徹尾祈る姿勢と聖霊を受けた経験があるか否かについてであった。彼は今日のキリスト者の多くが、聖霊を受けた経験がないことを批判的に捉えている。

もつとも、琴自身は、聖霊降臨についての経験には少し距離をおいている。自分自身でも何を言っていたか記憶にないし、ホーリネスにいた頃には、あれは西洋の狐つきだと言う人もいたとも話す。また、一度、「異言」を語ることを経験すると、次からは、それほど時間がかからずに「異言」を言えるようになったという。自らでコント

ロールしながら、「異言」を語る状態にもつていくことができたというのである。

ただ、その一方で、色々と教義や考え方の違う教派を経験したことは、自分にとってよかつたとも語る。戦後、日本基督教団の教会に属してからも、色々な立場の人の意見を聞くことができた。そのような教派ごとの特色を学びながら、琴は自らの信仰を再構成し続けてきたのかもしれない。

三節 栄の説教と信仰

「神なき人生は暗黒なり」

ここで少し、栄の説教のいくつかを取り上げて、彼のキリスト教への信仰観をみてみたい。琴によれば、信者のなかには講談よりも面白いといって、栄の説教を聞きにきた学生もいたという。説教そのものの内容や語録は多くは残っていないが、彼が記した説教の原稿、ないしは要約とみなしうるものは、『後の雨』のなかにいくつか見出すことができる。以下では、それらのテキストから、栄の信仰や説教の特質を考えてみたい。

彼がまとまった形で文章を残しているのは、『後の雨』三三三号の「神なき人生は暗黒なり」が最初である。栄はまず、詩篇九〇篇を紹介し、それが「人間の運命があまりに果かなくあることを如実に言ひ表はして」いるという。

私はこうして生きておるけれど、一体、何を望んで生きているのだろう。瞬間的の快樂によつて自己を満たそうとしている。けれどいつまでこの快樂を続けることが出来るだろうか、千年も一夜の寝の如し、又生きながらえても七〇才、よく生きて八〇歳がせきのやまである。

このように果かない人生に何故に人間は充分な快樂を求め得られずして、もがきもがいて苦しみぬかねばならぬのであろう。^{*19}

そのような背景として榮は、人間が罪を犯し、樂園から追放された経緯を説明する。それは一言でいえば人間の墮落の歴史である。「アダムが罪をおかしてエデンの園をおはれてから、カインは弟アベルを殺し、ノアの時代にいたつて地に悪が満ちたため、すべての民は亡ぼされ、バベルの塔を築くに及んで民は全地に散らばされてしまつた。」

それでも神は、人間をもう一度樂園の生活に戻すために何人も預言者を遣わし、最後には「神の独子イエスをこの世に遣はし給ふた」という。彼は、人々の罪の身代わりとなって十字架にかけられるが、それによって我々は「罪人であるけれども義として下さつた」とまとめている。

以上のように人間の罪とイエス・キリストによる救いを榮は説教で語っている。この内容はある意味で非常に標準的なキリスト教の説教であるようにみえる。逆にいえば、そこにはあまり榮の個性は感じられず、教条的な聖書理解の域をこえるものではないといえる。

しかし、次の説教では、少し異なつた表情がうかがわれる。

「安心の基礎」

次に紹介するのは、『後の雨』四四号に掲載された「安心の基礎」である。「人生にも大きな動かない基礎が無け

ればならない」と栄は語り始める。彼はこの世的な富や栄誉を否定したうえで、「天地万物を造り給ふた真の神の言を土台とする」ことを説く。具体的には、「聖言を実行する事」、「一切我意を捨てて神の聖言に従ふ事」がそこで求められる。

在る時は、金も必要であります。と同時に地位も名誉も決して馬鹿にすべきものではなく、特に金は人生に必要であります。それ等が人生安心の基礎には成りません。金とはなんです。それは貴方の罪の身代りとは成つて呉れません。金の余り多く有る事は貴方をより以上苦しみに落とし入れる事もあるのです。地位でも名誉でも然り、生くると言ふ上に於て寧ろ邪魔に成る事もあります。

そうするならば貴方の人生の真の安心の土台とすべき物はそんな金や名誉や地位でも無く、真の神様の御救ひを受ける事と、そして其の聖言に従つて歩み、何時審判を受けても恥ないと言う信仰であると御解りに成つた事と存じます。^{*20}

ここで栄が語っていることは、実に単純である。また、この「聖言」への絶対的な服従は彼のメソジスト的な信仰を指示しているのかもしれない。彼は、安心の基礎を「神への信仰」に位置づけながら、現世的な富や金銭をその対照として批判していく。

「在る時は、金も必要であります。と同時に地位も名誉も決して馬鹿にすべきものではなく、特に金は人生に必要であります。それ等が人生安心の基礎には成りません」という表現は、また穏便なほうである。論調はやがて、

「故に眞のクリスチャンは此の信仰を保つ為には金なんか問題にしません」となり、さらに説教の末尾近くでは「人の御蔭で受けた安心は恐ろしい事です。何時かは又は色々な手段に依つて報酬を求められる故に安心出来る所か、より以上の悲惨な状態に落とし入れられる事があります。金でも同じです、凡て肉を喜ばす様な物質に依る安心は皆駄目です」と断言されることになる。

確かにここには複雑な教義も奥行きのある論旨も見出せない。ただ、そこには、栄独特のリズム感のようなものがある。最初は、やんわりと批判されていた「金や名誉」は、最後には「肉を喜ばす様な物質に依る安心は皆駄目」と完全に否定されてしまうのである。同じようなリズムが感じられる記述を、先に記した義父を見舞ったエピソードの後半から抜粋してみる。

神と言ふと一般人は、何だか恐れる傾向があるが、決して此は恐るべき実在ではない。此は懐かしい霊の父である。又お父さんと名前の付く以上一人あるべきである。日本の人が言ふ様に八百万の神があればそれだけのお父さんが居る訳だから、理屈も合わん所がそう言うと言ふだろう。いやそれは色々と業をなさるのに、雨を降らす神あれば食物を与へる神、地の神、便所の神、犬の神、猫の神、蛇の神、馬の神なんて馬鹿げた話ではないか。

何が馬の神だ。馬なんて人間が食物さへ与へて居れば、生きて行くでは無いか。分業しなければ手の廻らない、又地のとどかぬ神ならば人間と同じではないか、それでは頼まれる仕格は無い。そんな神だから良く腹を立てて崇めるのだろう。神とは人間以上の力あつて我等の靈魂を左右し死後を審判する方ではない。天の使は多くあるが眞理なる神は唯一人である。其の神より人間は出でた故、四海同胞兄弟姉妹と呼ぶのである。^{*21}

ここには「栄節」とでもよべそうなテンポと論理の展開がみられる。彼は、神が恐ろしい存在でないことを説き、同時にその存在が、日本のような「八百万」ではありえず、ただ唯一の存在であると記す。そして、それぞれの職掌に応じて神がいるという考えは「馬鹿げた話」と一笑に付している。

「何が馬の神だ。馬なんて人間が食物さへ与へて居れば、生きて行くでは無いか」といった物言いは、多神教を正面から論駁するものではない。「食物を与へる神、地の神、便所の神、犬の神、猫の神、蛇の神、馬の神」といった連想のなかで呼び起こされた動物神へのやや性急な批判ではある。けれども、このような連想がテンポよく飛びだすところに、栄の説教の現場を髣髴とさせるものがある。そして、栄が強く主張するのは人間の力をはるかに超越した存在である。「神とは人間以上の力あつて我等の靈魂を左右し死後を審判する方」にほかならない。

「真の忠義」

この説教のテーマは、文字通り「忠義」とは何か、である。だが、この説教には、これまでとは比べ物にならないほど複雑な要素をはらんでいる。掲載号は『後の雨』四六号である。

聖書の箴言の書に「怒りをおそくする者は勇士にまさり、己の心を治むる者は城を攻め取る者にまさる」（十六―三二）とあるが、此は実に大いなる（ママ）真理である。幾万の敵を攻撃する人は多くまた功名手柄を立てる人は少なくない。併し心の中にある敵と戦って勝利を得る人がそも幾人あるであろうか。

怒りは心にひそむ人間の最大敵である。故に此をおそくする者は勇士に優るとある。此は道理で幾万の敵を倒す事が出来ても少しの己の怒りの為に取かへしのつかぬ失策を演じ、己のみでない妻子を泣かしめ、又他人に迷惑を懸ける様な事があるならば、此は跛の勇士である。

御国に忠義な人と言へばすぐ何々一等卒とか又は何々大将とかとかく軍人を引つ張り出すが世間の人の普通の様子で所謂外敵と戦つて此に勝つた人のことである。

しかし、聖書の教へる所の真の忠義なる人は外に向つても強く、内的にも強心中の敵を亡ぼし得る者でなければならぬのであります。^{*22}

栄は、ここである危うい均衡のうえに立っている。彼は「忠義」や「孝行」というナショナルリズムを喚起し、ここに着床しやすい言葉を用いながら、それらをキリスト教の信仰と融合させようとしているようにみえる。

箴言の言葉を借り、戦いの勇者よりも己自身に克てと栄は記している。怒りは人間の最大敵であり、たとえ勇士であつても自らの怒りをおさえられない者は真の勇士ではない。確かに世間における「忠義」とは軍人に代表される勇士が想定される。しかし、聖書の教えでは、「真の忠義なる人」は「外に向かつても強く内的にも強く心中の敵を亡ぼし得る者でなければならぬ」ない。その意味では、旧約聖書の「士師記」に登場するサムソンでさえ、否定的に取り上げられている。

故に萬の敵を倒す前にまづ一人の内乱者を改心させる事が一番国のためである様にいつこの国でも本当に何はせ

ておいても国法に従う者、君主に戦争のときのみで無い平常の時も良く服従する者を養成しつつあるのであります。戦ひには、二種の戦ひがありまして、それは先にも申上げた様に外敵と戦ふ事と心の奥に攻めてくる所の敵と多々戦ふ事があります。多くの人は此の外敵には多くの心を注ぎますが、内敵は重視しない傾きがあります。

(中略)

ああ故に私は叫びたい。我が愛する祖国の人々よ、外敵に向つて強く立つ如くまづ其の先に心の誘惑に勝つ者となり、罪を犯すなど。

此が真の御国に忠義なる人であります。君に忠親に孝をつくし得る者でなければなりません。真の忠義は真の親孝行に必ずなるのであつて親孝行と忠義とは離すべからざるものだと(日本に住んで居る私は)^{*23}信じます。

ここで、注意したいのは二つのレベルの言説が交互にあらわれていることである。「我が愛する祖国」と呼びかける栄が、次のパラグラフでは「此が真の御国に忠義なる人」であると論じる。しかもその「忠義」の対象は、再び「日本に住んで居る私」からのものであることが確認される。「祖国」や「日本」といった語彙は、そのままナショナルな言説へと収斂していく。だが、他方で「御国」をめぐる言明は、キリストへの信仰へと収斂していく。引用部に続いて栄は、忠義な人を養成するためには、「イエスキリスト様に依つて今迄の罪を許して頂き、そして心を潔めて頂く」必要があるとしている。そのためこの説教は、二通りの解釈が可能となる。

一番目の解釈は、これをナシヨナリズムの称揚として理解する読みである。国力の充実のためには、道徳的に正しく忠義を重んじる者を育てることが寛容である。栄はそのように説いているようににもみえる。「墮落者を多くだ

す国は危いもの」であり、これこそが、「かつての大国『ローマ、ギリシア、エジプト』などを亡ぼした原因^{*24}」である。だから、君主や国家に従順な人間を育成するためにキリストの教えは有用である。このような読み方が可能である。

他方で彼はここで戦いそのものを暗に否定し、その閉塞を抜け出す方途として、神の愛を説いているようにもみえる。この説教の結論部分を記しておく。

故に本当に君に忠義たらんと欲する者は末づ何はさておき、基督様を信じ、その汚れた罪を潔めて頂き、心中の敵に立派に勝つ者と成つて頂かねばならぬのであります。我田引水ではない「信仰信仰と言つても偶像では駄目ではありません。偶像は手が在つても救ふ事が出来ず、足が在つても歩む事が出来ません」。生ける真の神キリストに頼らねば、本当の勇士とは成れず、又本当の忠義な人には成る事は出来ないであります。

私は信じる、兵隊さんに合格せなくても立派に忠義はつくせると。己が家業にいそしみ妻子を安心させ又外の人を助けいつでも生ける真の神の前に出でられる様に支度が出来て居るならば、これ実に御国の為になる人で君に忠実なる人^{*25}であります。

「兵隊さんに合格せなくても立派に忠義はつくせる」という表現は、後者の解釈を後押しするものにもみえる。「家業にいそしむこと」、「妻子を安心させる」こと、「外の人を助け」ることは、すべて人々が日常の生活のなかで実行可能なものである。そのような日常生活における勤勉さが、神への信仰に根ざしたものと考えるのは、カルヴァ

ン以後のプロテスタント信仰の延長と捉えることも可能だろう。

だが、そのうえで彼は、「これ実に御国の為に成る人で君に忠実なる人」として、二つの言説を並列化しようとしている。依然としてこの文章は、両義的である。

このような栄の信仰が、やがてくる時代のうねりのなかでどのように変化していくのか。また、琴自身は、このような戦前のキリスト教のあり方をどのように捉えていたのか、そのことについても問いなおすときがくるだろう。

四節 新たな家族・独自の伝道

長男の誕生と再就職

すでに述べたように結婚後二人の収入は、信者の献金と宣教師からの給金四〇〇円に限られていた。琴の退職前の月給が四五円であったことを考えると、生活は決して楽ではなかったことがわかる。端的に言って牧師の生活は、貧困との戦いであった。ガス代の節約のため、二人はたきぎを拾いに行くことも度々であった。

一九三三（昭和八）年の一月一七日、長男の徹宗が生まれる。初めて共同風呂に連れていったときに、周囲の人達から「可愛い子」と言われたことを、琴は記憶している。

ところが、その年の二月頃、琴は理由を忘れてしまったが、鎌田町の教会を出なければならなくなった。そこで、同じ東区の石神堂町に移転することになる。引っ越し先の家は、鎌田町の家とよく似た間取りだった。食堂になる二階も鎌田と同じような広さであった。二階にのぼる梯子の位置は、栄とジュルゲンセンの二人で簡単に移してしまった。琴によると、宣教師は開拓伝道の場合も想定して、建築の勉強もしていたからだという。

この年の四月、琴は清水尋常小学校に再就職する。長男の徹宗の子守は、栄の妹の八恵子にみてもらうことになった。最初の頃は、授乳のために八恵子が徹宗を背負って学校まで連れてきてくれた。しかし、家から学校までばかりの距離があり、生まれたばかりの子供を連れてくるのはなかなか重労働である。そこで、学校の近所に住む、受け持ちの子供の母親に預かってもらって、昼休みに授乳するようにした。やがて、生後八カ月を越えようと、昼間はミルクで過ごすようにした。

宣教師からの分離と栄の中学入学

ちようどこの頃、宣教師と栄は思わしくない状態となり、ついには分離することになった。琴の就職も宣教師としては気に入らなかったようである。

一方、栄自身も悩みを抱えていた。彼自身は「召命」を受け神学校に行ったが、学歴としては高等小学校を卒業したにすぎない。学識不足を感じることも多く、もう一度、中学校で勉強することを望むようになる。

どうやら、その背景には、信徒たちとの軋轢も影響していたようである。この時期、琴と栄の教会の信徒のなかには、栄たちとは立場を異にして教会を離れる者がいた。直情な栄は、信者たちとかなり強く議論をすることもあったという。「弟だったら殴ってわからせるのに」と信者に言い放ったこともあったそうである。そのような信者のなかには教会を離れるばかりか、教会の近くの信徒の家で、かってに集会を開く者もいたという。

「教会を離れて、自分たちの耳障りのよいことをいう人が集まっていた。結局、そのような集まりは、長続きはしない」。その頃を振り返って、琴は語っている。しかし、その頃の琴と栄にとって、信者たちの離脱は、精神

的にも経済的にも大きな痛手であったことは間違いない。栄の日記によると、この離脱者の一団は、その後、ホーリネス教会へ転会していき、その紹介状を彼自身がかいた経緯が記されている。栄としては、やりきれない思いであったことだろう。

同じくこの時期の日記をみると、琴も栄の進学にはあまり乗り気でなかったようである。それに対して、栄の進学の思いは日増しに強くなっていった。そこでミッションスクールである名古屋中学校に頼んで、中学三年への編入試験を受けさせてもらうことになった。

今日、恐れを持って中学三年編入試験に列した。皆むつかしく困った。伴凡に答案を書いて置いた。

口問口答の時間に油をしばらくられた。僕を皆、特異の目で見ている。行けるようになるだろうか、けれど、主の御旨なれば必ず道が開かれる事を信ずる者である。今日はイングリッシュの小雑文が送って来た。今日試験を受けたのは僕が二九才で一番の年長者だが、二十の男が二年生に一人いた。

中学の入学試験を受けた日の日記にはこう記されている。入学が決まったものの、入学金や教科書代などの蓄えはほとんどない。琴は奈良の実家に頼んでみたが、親族たちは、改めて学校へ行くことに反対した様子だった。しかし、母親は琴が困ることと思ひ、当座の金を工面してくれたという。

昭和一〇（一九三五）年、四月より栄は、名古屋中学校に通うことになる。朝は徹宗を保育園に連れて行ってから学校に行く。若い同級生に「おとうちゃん」と呼ばれながら、学校の帰りには再び、徹宗を連れて帰る毎日だっ

た。暮らしは相変わらず質素を強いられた。名古屋中学校の先生方も家庭状況を察して、栄の散髪をしてくれたり、何かと援助してくれた。ある先生からは、「赤貧洗うがごとき生活というが、この家には洗うものもない」と言われたことが、印象に残っているという。

この年には、長女の訓子が生まれる。訓子の「訓」という名は、名古屋中学の漢文の先生がつけてくれたものである。すでに栄の進学以前から、琴は身重の状態で学校に通っていた。この当時の日記をいくつか抜粋してみる。

一月十二日 胸は大分らくになったが手足はどうもいけない。原因をいって祈るにもはつきりわからない。「すべてを知り給ふ神よ、我はエホバにして汝を癒すものなりとの給ふ神様、手、足とのどを癒し給へ」と祈る。

一月一五日 雨だ。暖かだがうつとおしい。今日もお腹がつっぱって肩で深呼吸する。足も重たい ああ主よ、第二子を使命あるよき者をお与え下さい

一月一六日 今日はもう堪らない帰りもとても森下から歩けず、バスで帰る。布池から家まで、あへぎつつの帰り道。帰つてすぐコタツに入る。集会があるが、雪がちらついてゐる。路傍をやめて七時半までねてる。説教は日曜に作っておいたのがあつてよかつた。

体が小柄な琴にとって妊娠と出産は、大きな負担であつたようである。そのようななかで琴は、必死で「神癒」を祈り、新たな命が「使命あるよき者」であることを望んでいる。

しかし、生まれた訓子がすこやかに成長することはなかつた。彼女は、翌年の九月に昇天する。この頃流行った

赤痢が原因だった。最初に徹宗が罹り、次に訓子が感染した。

訓子が息を引き取ったのは、ちょうど礼拝の最中だった。そのことを記憶しているのは、当時、まだ四歳にみたなかつた長男の徹宗である。その頃、子供たちは礼拝のあいだ、二階の部屋にあげられていた。両親をよぶこともできないまま、徹宗は妹の死を看取ることになったわけである。

訓子の葬式の後で、栄までが病気に罹り避病院に入院させられる。感染を防ぐために家は消毒された。学校も休校となり、琴は自宅待機をせざるをえなかつた。

また、八恵子は琴の夏休みに鹿兒島に帰っていたが、そのまま戻ってこなかつた。琴のショックは大きかつた。しかし、八重子にとつても、名古屋での生活は相当大変なものだつたのだろう。彼女は学校を出てすぐに環境の違う場所に移り、慣れない生活を余儀なくされた。兄夫婦との生活も様々な面で気兼ねすることがあつたはずである。葬式や入院などで家の中がごたついていたとき、徹宗の子守をしてくれたのが、大阪に嫁いでいた姉の晴己子である。彼女には子供がいないので、喜んで預かってくれたという。徹宗も彼女にはよくなつた。後に栄に叱られて家の外に出されたときには、「大阪のおばちゃんのとこに行こう」と思ったという。

後年、徹宗は、自分の長女——琴にとつての初孫——に「訓子」と名づけることになる。徹宗は、この時の訓子の死を自分の病気を受けたものと思ひ、責任を感じていたのだろうと琴は察している。

「今思うと私も栄養失調だつたと思う」。そう、琴は記している。時々、顔がうたばれて目が細くなる。学年主任の先生が心配して、琴を無理矢理医者に連れていくこともあつた。別に病気でもないとのことだつたが、端から見ると、腎臓か心臓が悪くみえたようである。

たまに職員会の弁当でウナギを食べたときには、目が開かれたような力を感じたほどだったとも、琴は記している。

日記、その他

良く言えば全てを神に委ねる日々、悪く言えば行き当たりばったり。二人の生活のそのような側面は、彼らの日記にも現われている。その「日記」も、現在残っているのは、昭和一〇年の一月一日から四月三日までのものだけである（数年、さらに一〇年近く後に断片的に書かれた文章は少し続いている）。最初は栄が書きだし、彼が故郷の鹿児島に旅をしている間は、琴が記している。だが、いかなる事情か、たんなる持続力のなさか、その日記が年の終わりまで継続されることはなかった。ただ、そこには当時の丸山家の生活の様子をうかがい知るいくつかの興味深い記事をみることが出来る。これまで引用した記事以外に、この時期に記された内容をいくつかのトピックスにわけて紹介しておきたい。

1) 信徒の数

まず、確認しておきたいのは、実際に栄の教会にどのくらいの信者が集っていたのかという点である。この当時の信徒の数は、十五人前後だった。しかも、毎週の礼拝に参加する人数は、五人にみたなかったようである。日記で知ることが出来る一九三五年の一月から三月の十二回の礼拝者の人数を示したものが図1である。ここにもるように朝夕合わせて、礼拝者数は、最大で一五名である。それも二月をピークとして、三月は礼拝者数が減少し続けている。これでは、伝道を続けること自体が困難な状況であったともいえるだろう。

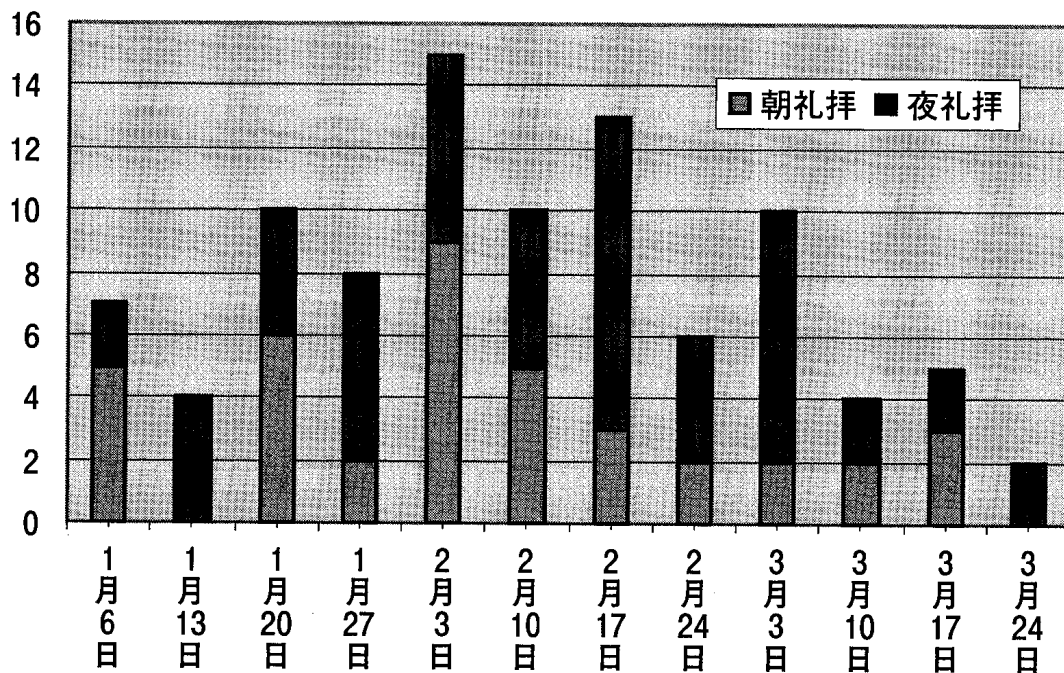
それをおぎなうように栄は、文書伝道に出かけている。これは文字通り、戸別訪問で聖書教会の冊子を販売するものだった。伝道は日々の生活に直轄するだけに、栄の日記でもほとんど最初のトピックスとして記載されている。日によっては「妻のバス代さへない故に土曜日でいそがしいのだが、十冊持って出かけた」(二月九日)こともあったようである。ただ、その一方で、「今日は疲れて文書伝道には行かなかった」(二月五日)や「朝、床を起き出ると一寸つかれがあったので文書伝道には行かなかった」(二月十三日)、さらに「文書伝道に行く積りであったが、今日は休養した」(三月二十九日)などといった文面も頻出する。

多いときには三〇冊以上を売っていたようだが、このように不定期の販売では、決して安定した収入にはなりえなかったことがわかる。

2) 魚捕り

だが、そういう困難な状況のなかでも栄は、趣味と実益をかねた楽しみがあったようである。それが、魚捕りである。魚と

図1 日曜礼拝出席者



いっても近くの川にいき、主にフナなどの川魚を網でとっていたようである。

日記には都合、七回、魚捕りの記事が登場する。その多くは、週明け、それも月曜日であることが多い。日曜の礼拝のあと、一息つくつもりで榮は、川に出かけて網をさしたり、釣りをしていたのかもしれない。

二月十八日

朝四時半に起き、祈りを二十分間〇して朝食をとった。

そして魚捕りに行った。三十五銭で買った網で、七時から捕り初めて四時までにフナを四百七拾匁ほど捕った。家に帰って「つくだに」にしたりした。隣のおぢいちゃんに少し差上げた。大きなのは、二百匁ほど。生かして置いた。明朝みそ汁にもしよう。

三月四日

今日は月曜日だったので、休息日にした。四時二十分過ぎ頃起床して朝食し、魚捕りに出掛けた。自転車の上で約一時間祈った。一二時過ぎまでに九百目ほどフナが捕れた。僕半生の最大のレコードだ。

夜はシャシミにして食べたり、ツクダにしたりした。後は皆、クシにさして焼いて置く。佐々木姉の所に八十目ほど上げた。

ああ此ぐらひ人がすなどれたらなあ

本当に主よ人をすなどる者とし給へ。

三月二十一日(木)

朝七時より家内と共に秋町に魚捕りに出掛けた。家内が寒くつかれた、などと文句を云って困った。フナやモロコを百目程捕りに来た。ツクシを少々つんで来た。

日によって魚が取れる量にはばらつきがあったようである。しかし、もつとも多いときで「九百目」というから約三・四キログラムの魚が取れたこともあったという。妻の愚痴と不平のなかでも四〇〇グラム近くは捕ったのだから、たいしたものである。

だが、ここで注意したいのは、三月四日の日記の最後の記述である。彼は魚捕りに続けて、「ああ此ぐらひ人がすなどれたらなあ、本当に主よ、人をすなだる者とし給へ」と記している。

この記述は、明らかに新約の福音書の記述が念頭におかれている。イエス・キリストには、一二人の使徒がいたが、最初に使徒となったとシモン・ペテロとその兄弟アンデレは、ともにガリラヤ湖の漁師であった。彼らが網をうっているのをみたイエスは、彼らにむかって「あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」といつて導いたとされる。栄は、日々の糊口をしのぐとともに、趣味でもあった魚捕りのあいだも、聖書の記述とクリスチャンとしての生き方を意識していたのである。

3) 日常のなかの終末観

栄の日記のなかに垣間見られる言葉として、「再臨」と「リバイバル」をあげることができる。これらの言葉はともに、栄たちの終末観と密接に結びついている。そもそも、栄の日記の書き出しは、「昨年など、今年はもう艱難時代に遭遇する年ではあるまいかと思つてゐたが、又今年を興へられた」と記されている。

艱難時代とは、「ヨハネの黙示録」などで語られている様々な災厄と迫害が押し寄せる期間をさしている。イエス自身も「その時には世の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような大きな艱難が起る」と語っている。神の子であるイエス・キリストが再臨する前には、大いなる艱難が世界に満ちあふれると聖書には預言されていた。栄たちにとって当時の社会状況は、終末を想像させるほどに逼迫したものだっただろうか。

その一方で栄は、与えられた年を「慎みて、務めてはげみて、深きをなし神の日が来るを俟ち此を速かにするのを務めよう」と記している。おそらく、「神の日」、すなわち、主が「再臨」する日への備えとして彼が希求したものが「リバイバル」であったと考えられる。

彼は、熱心な信者が兵隊に徴収された日の日記では「おお主よ、現状をかえりみ給え。リバイバルよ起これ。我が教会のみならず、全教会にリバイバルよ起これ」と繰り返し返していた。それは、来るべき日に一人でも多くの者を救いたいという彼自身の信仰にほかならなかった。また、同時にこれまで記してきた「聖霊のバプテスマ」を強調する「聖書教会」の教えが、集団的で熱狂的な「リバイバル」を望むメンタリティを醸成していったとも考えられるだろう。

磁器の皿について

日記以外にも、栄の信仰が表現された遺品が残っている。写真3、4は琴が持っていた一枚の中皿である。色絵の磁器のようだが、皿の中心には、盾の形に十字架が刻まれ、四方には一文字ずつ、「新・生・聖・化」と記されている。その周囲には、聖句と神への賛美の言葉が記されている。

「信仰生涯とは神に保証セラルル生涯」

ソレ神ハソノ獨子ヲ賜フ程ニ世ヲ

愛シ

給ヘリ

スベテ

彼ヲ信スル

者ノ亡ビズシテ永遠ノ生命ヲ得ン為ナリ

真ノ信仰生涯 犠牲の生涯

また、皿の裏面には、

名古屋市 牧師 丸山榮

起波勇(作品)

一九三五年作(昭和十年)

と記されている。この皿を焼いたのが信徒だったかどうかは定かでないが、とは間違いない。

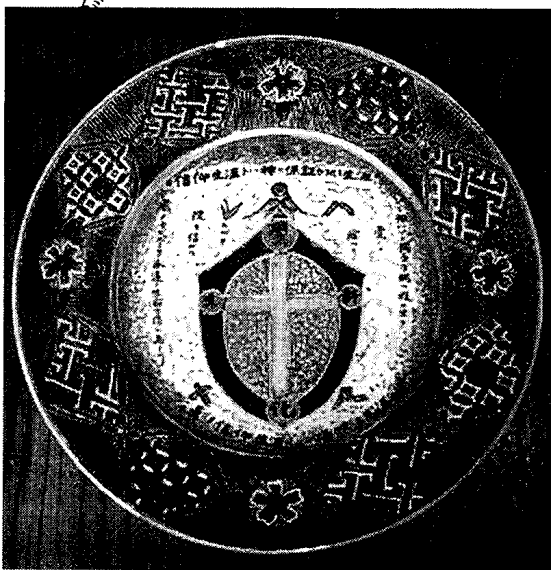


写真3こ

この十字架の周囲に記された言葉は、フリーメソジスト以来の栄や
琴の信仰の中核をしめる考えであった。また、この盾に十字架という
意匠は、詩篇の盾の歌から取られたものであるとともに、栄の出世の
地、鹿児島藩の薩摩藩の家紋を意識していたようである。薩摩藩の島津
宗家の家紋は、丸に十字というデザインだからである。

聖書の言葉と故郷の士族の家紋、この二つの意味が重ねあわされた
意匠を、栄は他の場所でも用いていた。琴が残っていた栄の遺品には、
栄が路傍伝道などで羽織っていたドテラが残っていた。そのドテラの
背中にもこの十字架の盾は、しっかりと縫い込められていた。



写真 4

註

- * 1 丸山栄一九三二「教会報告」『後の雨』四三号、八
- * 2 前掲書 八
- * 3 前掲書 八
- * 4 J. W. ジュルゲンセン一九二九「後の雨の使命」『後の雨』一号、一
- * 5 日本聖書協会編一九六五（一九五五年改訳）『聖書』「マタイによる福音書」三章一三一―一七
- * 6 日本聖書協会編一九六五（一九五五年改訳）『聖書』「マタイによる福音書」三、一一
- * 7 日本聖書協会編一九六五（一九五五年改訳）『聖書』「使徒行伝」
- * 8 日本聖書協会編一九六五（一九五五年改訳）『聖書』「使徒行伝」二、一一―四
- * 9 J. W. ジュルゲンセン一九二九年「後の雨の使命」『後の雨』一号、一一―二
- * 10 編集部一九二九年「信仰綱要」『後の雨』二号、七―八
- * 11 久山康 他一九六八年『近代日本とキリスト教―大正・昭和篇』創文社／基督教学徒兄弟団、江端 公典
二〇〇六『内村鑑三とその系譜』日本経済評論社などを参照。
- * 12 このほかにも「聖霊のバプテスマの証拠」（二〇、二一号）などが掲載されている。
- * 13 J. W. ジュルゲンセン「方言の歴史」『後の雨』一七号、三
- * 14 J. W. ジュルゲンセン「方言の歴史」『後の雨』一八号、四
- * 15 丸山栄一九三二「教会報告」『後の雨』四三号、八
- * 16 丸山栄一九三二「他宗と基督教」『後の雨』四〇号、六
- * 17 丸山栄一九三三年「信仰と禮拜」『後の雨』四九号、五
- * 18 近藤「文の約束を待て汝らは日ならずして聖霊にてバプテスマを施されん」一九三三『後の雨』四六、六一
七
- * 19 丸山栄一九三二年「神なき人生は暗黒なり」『後の雨』三三号、三
- * 20 丸山栄一九三三年「安心の基礎」『後の雨』四四号、八

- * 21 丸山栄一九三三「他宗と基督教」『後の雨』四〇号、六
- * 22 丸山栄一九三三「真の忠義」『後の雨』四六号、八
- * 23 前掲書、八
- * 24 前掲書、八
- * 25 前掲書、八
- * 26 日本聖書協会編一九六五（一九五五年改訳）「マタイによる福音書」『聖書』二四—二二